

# 思ひ草

第35号

令和3(2021)年6月30日 発行

## これからの「共育」を考える

人間開発学部長 なりた 成田 のぶこ 信子

國學院大學人間開発学部は、創設13年目を迎えました。卒業生がミドルリーダーとなって教育現場で力を発揮する年代となっています。教職に就いてがんばっている卒業生の姿に、あらためて人間開発学部創設時から大切にしてきた「共育」の精神について考えるようになりました。「共育」とは人と人が共に育ち育てられることです。学生同士、学生と教員、学生と子どもたち、学生と学校の先生方、学生と地域の方々等、さまざまなつながりによって学生は可能性を伸ばしてきました。

現在世界は、コロナ禍ともいうべき未曾有の事態に直面しています。学生の学びの環境も大きく変わりました。人と人が直接出会って学び活動することは当たり前ではなくなりました。「共育」を問い直すことになりましたが、学生はかえって共に学び育つことの意味を意識しているようにもみえます。遠隔授業が続いていた時期の後に、教育法の授業を対面で行いました。小学校5年の教室を想定した

インタビュー学習の模擬実践を行ったのですが、学生は、相手の表情を見て次の言葉を繰り出すことの大切さ、話題を紡いでいって互いのことを知り合う楽しさを感じて書いていました。遠隔授業でもグループディスカッションは可能ですが、対面で同じ場所にいるからこそつかめる感覚があります。昨年度は延期や中止を余儀なくされた教育実習も今年度は実施され、学生は子どもたちと共に学ぶよさを実感しています。感染対策の徹底という条件下の中学校を訪れると、机間指導や生徒の意見を生かした板書等、教室に共にいてこそつかむことのできる学びがありました。

今後オンラインを活用した新しい教育が模索される中で、「共育」はさらに大事な概念になると思われます。人との出会いが貴重な機会になっていくとしたら、学生も教員も今まで以上に意識的にその場に臨み、共に育ち互いの可能性を伸ばしていきたいと考えます。

## 「イチゴ泥棒は誰だ」

教育実践総合センター長 こんどう 近藤 よしひこ 良彦

教室の机の前に立たされた私と友達に先生は言った。「畑のイチゴを食べたでしょう」。「食べてません」と言っても話はずっと続く。「お腹痛くなりますよ」と言われても「食べてないから痛くならない」と思うだけ。言うこと聞かないからイチゴ泥棒にされちゃったのかな。数日後、教室に入っていくと「イチゴ泥棒捕まった」とクラスの子が教えてくれ、先生はゆっくりと顔を背けられた。その光景は今でもよく覚えている。小学2年の時である。しかし、その記憶に嫌な印象は残っていない。

小学6年の理科の出来事である。先生が「溶液には何がありますか」と質問された。その質問に戸惑っていると、クラスの中でも腕白な子が「恵那駅」と答えた。すると先生の顔が急に怖くなり「ふざけるんじゃない」とその子の頬をいきなり平手でびしゃ。教室は一瞬静まり返った。殴られるようなことかなと皆思ったのだろう。このことは中学でも語り草になった。ただ、今はその理由が少しわかる。最近になって知ったが、その頃に理科の内容が大きく変

わった。その先生は担任ではない。多分、男性だから振られたのだろう。実験は、塩酸を水酸化ナトリウムで中和し、水を蒸発させて塩の結晶を観察するものである。思い出してみれば、授業はよく準備されていた。内容は危険を伴うものでふざけていけないのは当然である。授業が始まる前、心なしか緊張されていたのを覚えている。念入りの準備、安全への徹底した配慮、授業に対する熱意が高じてあの行為に及んでしまったのではないだろうか。

翻って、あの小学2年の記憶になぜ嫌な印象がないのか。それは低学年だったからではないか。子どもが小学1年の時、給食室で火事が起こりしばらくの間給食が中止となった。そんなある日、子どもが「校長先生が謝ってた」と驚いていた。大人、それも先生に謝られることは想定外だったようである。小学2年の頃、学校とは先生とは絶対的であり、それが当たり前だった。だからなんの疑問も感じなかったのかな。そう考えると、子どもに教えることは簡単ではないぞと思えてくる。

## 教育実習

### 教育実習で与えられるもの

子ども支援学科助教 なかの けいすけ 中野 圭祐



5月から6月にかけて幼稚園での教育実習が行われます。本年度も、多くの学生が深い学びを得ています。実際の子供達を目の当たりにすること、子供達と接すること、子供達と接する教師の姿に触れることなどを通して、学生自身の内面が揺さぶられているのだと感じます。そしてそれらの出来事が、これまでに得てきた大学での学びと繋がり、子ども理解、遊び理解、保育の理解へと繋がっていきます。

ある学生は「子どものことを、4歳児、5歳児、というようにまとまりとして捉えてしまっていたが、実際に接してみると、一人ひとり違って、自分の関わり方もそれに応じた関わりが必要だと気づいた。」と述べていました。またある学生は、「遊んでいる子どもに何かをしてあげようと思い込んでいた。まずは寄り添うことが、その子どもの自信につながるのだと感じた。」と述べていました。これらの学生の気づきや学びは、実体験として学生自身が経験しない限り得られないものです。

倉橋惣三は『育ての心(1976)』の中で、「人が人に触れてゆく意味では、両方が、与えもし、与えられもする。幼稚園では与えることより触れ合うことが多い。しかもあの純真善良な幼児と触れるのである。こっちの与えられる方が多いともいわなければならぬ。」と述べています。教育実習の事前指導では、学生は自分が子ども達に何ができるのかを考えます。それは教師としての保育の営みを知る上で必要なことです。しかし倉橋の言う通り、学生らはこの実習を通して、まさに子ども達や教師から多くのものを与えられて帰ってくるのです。それは子どもと接する一瞬一瞬の中での、「そうか」「そういうことか」という気づきであり、更に、実際にこれまでにその子どもと生活を共にしている教師の思いや願い、保育の姿などからの学びでもあります。

この教育実習で与えられたものが、実習後の大学での学びへと繋がっていくよう、皆さんを応援したいと思います。

### 子ども理解の大切さ

子ども支援学科 4年 なんば ほのか 難波 穂香

3週間の実習は不安と緊張でいっぱいの中スタートしましたが、子どもたちの笑顔と優しく指導して下さる先生方のおかげで、様々な事に積極的に取り組もうと思えることができました。教育実習を終えて特に大切であり、将来子どもと関わる仕事をしていくにあたって重要であると感じることがあります。

1つ目は子どもたち一人ひとりの気持ちに寄り添った声掛けを日々探し、援助していくことです。保育室から出てしまう子には、どのように声掛けをしたら良いのか日々考え、その日の反省会で先生方にもアドバイスを頂いて次の日にはこうしてみようと自分の中で目標を立て、関わることができました。また、「お弁当を食べたくない」と言う子にはどうして嫌なのか、何が嫌でそう言っているのかを聞いて、その子の気持ちに共感し「先生も掃除頑張るから、こっちのおかずだけ頑張ってみよう」と言って援助しました。年長組に入った時にいざこざがあり、年長組であるからこのような声掛けにしてみようと考えて行い、仲介のアドバイスを頂きました。子どもたち一人ひとり年齢も違えば性格や思いや考えも違うと思うので、理解し寄り添うことは大切であると学びました。

2つ目は部分実習を行った際に感じたことで、子どもたちの日常をよく観察し子どもたちが自ら色々なことに挑戦できるような環境を作ることです。私はコーナー遊びを任せられたのですが、一つのことしか提供せずにその後の子どもたちの遊びの広がりを考えていませんでした。子どもたちは大人以上によく周りを見ていて想像力も豊かであるのでそこを考え、更にその子どもたちのやってみたいという思いや関心をもっと引き出すために材料や環境構成も考えることが大切であると学びました。

このように授業だけでは分からない、自分が実際に体験してみても学ぶことや感じるものが多くありました。もちろん授業で学んだことを活かす場面もあり、学びが深まったこともありました。教育実習での先生方の指導や行った経験を忘れずに今後の将来に繋げていきたいと思っています。

## 教育インターンシップ

### 子どもたちの姿から学ぶこと

初等教育学科 2年 <sup>さかい</sup>境 <sup>ももは</sup>萌々葉

私は今年の4月から、母校の小学校で教育インターンシップの活動をしています。週に2日、特別支援学級での活動で、子どもたちや現場の先生方から多くのことを学ばせていただき、とても充実した活動をしています。その中で私自身が感じたことについて述べます。

まず私は、教育インターンシップが始まる前にいくつもの授業を通して、なにより「子ども一人ひとりを理解すること」が大切だと学びました。そして、実際に教員の卵として活動させていただく中で、それがどれほど大切なことなのか実感することができました。そう感じたきっかけの一つは、1年生の男子児童との出来事でした。この小学校の特別支援学級では朝の会が終わると、子ども一人ひとりに合わせて設定された個別課題に取り組む時間があります。その日、その児童はなかなか課題プリントを始められず、他のことで遊んだり机に落書きをしたりしていました。何度注意しても一向にスイッチを入れることができず、私自身どうしたらよいのか分からなくなっていました。しかし、これまでその児童と関わる中で、褒められたり児童の好きなことについて話をしたりするときは、とてもいきいきとした表情で、進んで話をしてくれることがありました。私はそのことを思い出し、何か一つ小さなことでも肯定して「自分は出来るんだ。」そんな風に思ってもらえるよう工夫して声かけを続けました。課題が進むにつれて児童のやる気もどんどん出てきて、あっという間に課題を終わらせることができました。

この経験から、叱ることと褒めることはどちらも大切ですが、それぞれの子どものに合った教育の仕方や対応の仕方は「子どもをよく知る」ことで見つけることができると、改めて感じました。子どもたちがより、いきいきと生活できるような教育を心がけて、残りの教育インターンシップや教育実習に励んでいきたいです。

### 教員と生徒の関わり方について

健康体育学科 3年 <sup>つじ</sup>辻 <sup>のぞみ</sup>希美

教育インターンシップに参加し、私は教員と生徒の関わり方について学びました。

私が教員となった時、1番大切にしたいことは「寄り添う」ことです。一言で寄り添うと言っても、その方法は様々です。生徒の相談にのり、共に考えることも寄り添うことでしょう。また、生徒とどれほど仲が良くても、教員と生徒の境界線はしっかりと引いてあり、叱らなくてはならない時は切り替えて厳しく接し、楽しむ時は教員が場を盛り上げる工夫をしたり、生徒に盛り上げるように指示をしたりしていました。これも生徒に寄り添うことではないかと、実際の教育現場を見て感じました。

教員と生徒との関わり方について学びながら、保健体育科の授業の準備や授業に参加して、生徒と直接関わりました。ある時、生徒数名が体育の授業終わりに、先生の元へ来ました。自分は一緒にふざけていたと思っていたが、相手は度が過ぎていると感じ、口論になったようでした。中学校ではよくある場面であり、私も中学生の時に似たような状況に遭遇しました。また、バレーボール部の部活動に参加し、放課後の生徒の様子を見ることが出来ました。1人の生徒が怪我をしまい、その対応をする機会がありましたが慌ててしまい、もっと冷静に対応をするべきだったと反省する場面もありました。

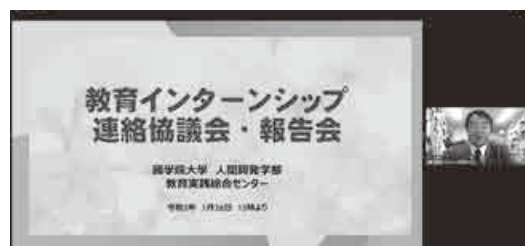
この2つの経験から、人との関わりから学ぶことが多い学校で、教員は生徒に何を伝えることができるのか、それをどのように伝えるのか、生徒の身体や生命を守るのは教員の役目であり、教員の責任感について改めて考えることが出来ました。自分が過ごしてきた学校を卒業して見直してみると、生徒の時には感じられなかったこと、新たな発見ばかりでした。



## 教育インターンシップ連絡協議会・報告会

経験からの学びを生かす

令和3年1月26日(火)、令和2年度教育インターンシップ連絡協議会・報告会をオンラインで、開催いたしました。全体会では成田信子学部長から、教育実習前の貴重な経験としての教育インターンシップの意義についてお話がありました。その後、令和2年度教育インターンシップの全体的な実施状況の報告に引き続き、学生の実習報告と学校や幼稚園の先生方からの実施状況報告がありました。保育園実習について子ども支援学科2年の長嶺結さん、小学校実習については、初等教育学科2年の大橋鈴さん、中学校実習については、健康体育学科2年の笹川晴輝さんが教育インターンシップの経験や学びをもとに報告をしました。また各園や学校の実施状況について、横浜市立新石川小学校校長の小嶋千里先生、横浜市立鴨志田中学校校長の濱崎利司先生、千代田区立ふじみこども園園長の糸原淳子先生から実習を通した学びを生かしてどのような教師を目指してほしいかということについて、期待を込めてお話をいただきました。そして受入れ校・園から先生方にご参加いただき、校種別に分かれた分科会では、教育インターンシップの経験を教育実習にどう生かすか」のテーマのもと、先生方からのアドバイスを参考に活発な意見交換を通し、学びを深めることができました。



### 第12回夏季教育講座

#### 国学院大学教育実践フォーラムのお知らせ

##### テーマ

『新しい教育課程の基準とこれからの教育・保育』  
～子どもの育ちや学びのカリキュラム・マネジメント～

**日時** 令和3年7月18日(日)  
13:00～17:00

**会場** 国学院大学たまプラーザキャンパス  
【オンライン開催】

##### 内容

- ◆全体会 基調講演他
- ◆分科会 ①幼保小接続 ②国語  
③音楽 ④体育・保健体育  
⑤道徳 ⑥特別活動  
⑦特別支援教育 ⑧地域連携

**参加費** 無料

**申込み** 教育実践総合センター

\*多くの皆様の参加をお待ちしています。

### 教育インターンシップ連絡協議会

##### 日時

第1回 令和3年7月1日(木) 15:00～  
第2回 令和4年1月25日(火) 15:00～

**会場** 国学院大学たまプラーザキャンパス

**内容** 教育インターンシップをよりよい活動や学びにするために受け入れてくださっている学校・園・施設の方々と活動の様子について情報交換・意見交換を図る。

#### 今年度のスタッフ

##### ◆教育実践総合センター

センター長 近藤 良彦

副センター長 高橋 幸子

担当 小笠原優子 鯨岡 廣隆 岩城眞佐子